

尼崎市避難行動要支援者の
避難支援体制づくりに向けた啓発等業務
企画書

20250917

株式会社ここにある会社概要



代表者	藤本 遼（ふじもと・りょう）
設立日	令和1年11月11日
資本金	300万円
住 所	兵庫県尼崎市杭瀬南新町4-16-33 hrd3
業 務	まちづくり・コミュニティデザイン・クリエイティブディレクション
取引先	尼崎市／豊中市／川西市／生駒市／洲本市／草加市／兵庫県／阪神電気鉄道株式会社／阪急電鉄株式会社／株式会社ライフデザイン阪急阪神／株式会社いきいきライフ阪急阪神／東急不動産SCマネジメント株式会社／株式会社地域環境研究計画所／株式会社Happy／株式会社ベネクト／株式会社アスノオト／株式会社コーディアル／NPO法人グリーンズ／NPO法人月と風と／（一社）豊中市介護保険事業者連絡会／真宗教団連合／エイチ・ツー・オー リテイリング株式会社 など
連絡先	090-8208-2918 / info@coconiaru-inc.com（担当：藤本遼）

◎目指していること

すべての人が楽しみながらわたしとしての人生をまっとうできる社会にするために「社会における生態系の再編集」を行っている。さまざまな分野や世代、背景を持つ人たちとの関わりを生みながら「つくる（状況）をつくる」を目指す。企業や行政、NPOなどさまざまなセクターとの連携・共創をベースにプロジェクトや活動を進める。

◎具体的にしていること

イベント・地域プロジェクトの企画運営や立ち上げ支援、会議やワークショップの企画・ファシリテーション、共創的な場づくり・まちづくりに関するコンサルティングや研修などを行う。代表的なプロジェクトは「ミーツ・ザ・福祉」「カリー寺」「ふくらむフクシ研究所」「おつかいチャレンジ」「武庫之のうえん」など。



本事業に対する考え方

最初のこのページでは、今回の事業・業務に取り組む前提となる考え方・スタンスについて記載します。
どのように実行委員や参加者に関わるか、防災や支援をどう捉えているかという
重要な部分について記載しています。

①「地域づくりの先の共助」を目指す

阪神・淡路大震災以降、「災害時には公助だけでは足りない。共助が命を救う」という認識が広まり、地域のつながりが注目されてきました。ただし、“災害時に助け合うために”日常の関係を強めようとする姿勢には、どこか押しつけの匂いがあるようにも感じます。助け合える関係は、日常の安心や信頼の上に自然に育まれるものです。本事業では、防災というテーマを入り口に、支援者同士が日常的に悩みや工夫を共有し、肩の力を抜いてつながることのできる関係性づくりを目指します。

②現場のリアルから学ぶことを大切にする

計画や座学ではなく、「動いてみること」「困ってみること」から得られる学びを重視します。車椅子での避難、認知症の方への声かけ、連携の難しさ——それらに直面するからこそ、実感と知恵が生まれます。今回の訓練では、失敗や気づきもすべてが財産。現場のリアルを共有し合い、参加者一人ひとりが「自分ごと」として避難支援を考える機会をつくります。

③異なる立場をつなぎ直す

高齢者施設、障がい者施設、学校、防災教育に取り組む若者たち——それぞれの立場で日々奮闘している人たちが、普段は交わることもないまま地域に存在しています。本事業では、避難という行動を媒介に、そうした多様な立場の人たちを“横に並ぶ関係”としてつなぎ直します。立場や専門性を超えて、対等な関係で「一緒に取り組む」ことが、持続可能な支え合いの芽になります。

④楽しく関わることで“備え”が続いていく

真剣であることと、楽しいことは両立できます。訓練はただの訓練ではなく、つながりを楽しむ時間でもあります。「一緒に取り組めてよかった」「また会いたいと思った」——そんな感情の積み重ねが、無理なく関われる地域の備えにつながると私たちは考えます。誰かにとっての“支援される場”が、誰かにとっての“関わりたくなる場”になるように、丁寧に設計していきます。

弊社は、上記の4つのポイントを重視しながら、今回の事業に取り組んでいきます。

事業の目的と効果

①「地域の中で顔が見える関係性」が備えになる、という希望を共有する

今回の避難訓練を通じて目指すのは、防災体制の整備だけではありません。参加する施設や団体が「顔が見える関係」でつながることが、実は最も強い“備え”になるということを、多くの市民と共有することが目的です。普段は交わる機会の少ない高齢者施設、障がい者支援施設、学校、地域住民が、訓練を通じて出会い、学び合うことで「共にある」感覚を育みます。これは避難行動要支援者だけでなく、すべての人にとって安心できるまちづくりの一步になります。

②要支援者の存在と支援方法を、市民にも“わかる形”で届ける

避難行動要支援者とは誰か？どう支えられるのか？——この問いに対して、市民は、ほとんど答えを持っていません。本事業では、訓練当日のパンフレット配布を通じて、市民にもわかりやすく情報発信を行います。単なる“周知”ではなく、支援の現場が見えるように、本人や支援者がどのように避難し、どんな声かけが役立つのかなど、行動につながる知識を届けます。発信だけで終わらない啓発として、実践と広報を一体化させます。

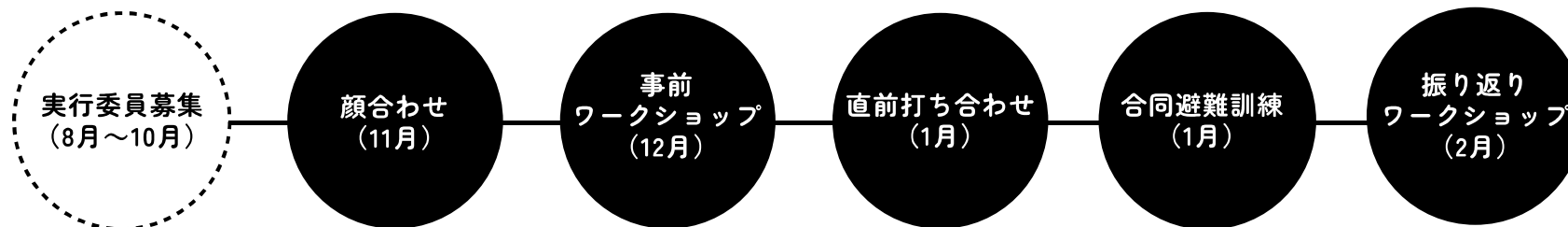
③「訓練をやって終わり」にしない。振り返りから次につながる循環をつくる

訓練後には、アンケートや振り返りミーティングを実施し、各施設が感じたこと、困ったこと、得られた学びを共有します。さらに、LINEグループ等を活用して継続的な情報共有を行い、イベント単発で終わらずに“地域の防災ネットワーク”として機能する仕組みを残します。今回の企画をきっかけに、「来年度は主催してみたい」と言えるような人材や団体が育つことも、この事業の重要な成果のひとつです。

具体的な企画・ワークショップ内容

このページでは、どのような企画を行うか、ワークショップの進行イメージはどのようなものか、どのようにまとめていくか、ワークショップの体制や準備はどのようなものであるか、という点について記載します。

全体の流れ



合同避難訓練に参加意欲のある団体に個別声掛けを中心に周知する。本事業では、合同避難訓練に参加する団体で実行委員会を結成する。

実行委員会メンバーの顔合わせをオンラインで実施する。施設紹介や自己紹介を中心に現在抱える課題などを共有する。

講義とグループワークを対面で実施する。防災の専門家から避難時に関する講義を行い、ワークでは各施設の困りごとを出し合い情報交換を行う。

合同避難訓練の前に、オンラインで当日の動きを確認する打ち合わせを実施する。実施に向けた不安を出し合い解消する。

各施設で避難訓練を実施後、キューズモール(予定)に集合して垂直避難を体験する。訓練後にパンフレットの配布を行い、市民にも啓発する。

実行委員会メンバーでオンラインの振り返りワークを行う。避難訓練の振り返りと共に、日常の情報共有を行える体制づくりのための連絡ツールを整備する。

事前企画

●時間

ワークショップはオンライン1～2時間程度・対面は3時間程度を予定しています。オンライン開催は夕方時間帯、対面開催は午前または午後時間帯を想定し、参加団体の負担を軽減できるよう配慮します。平日開催を基本としつつ、対面は土日実施で調整予定です。

●場所

・オンライン

Zoom

・対面

尼崎市内の公共施設・地域拠点（生涯学習プラザなど）

参加団体の施設をお借りしての開催も検討

→ 移動負担の少ない場所を選定し、日常に近い空間での開催を重視します。

●内容

・第1回

オンラインで施設紹介や避難時の課題共有を行う。

・第2回

対面でのワークショップを実施する。まず防災の専門家(防災教育学会会長：諏訪清二氏)による講義を通して、支援現場で直面しがちな課題や避難時の工夫事例について学ぶ。その後、各施設が「自分たちの現場では何が困るか」を具体的に出し合い、グループワーク形式で課題を整理・分類する。移動の支援、認知症の方への対応、声かけの難しさ、職員配置の工夫など、現場ならではの悩みを共有しながら、他施設との共通点や違いを学ぶ。最後に訓練本番での役割や連携の方法をすり合わせ、「一緒に取り組む」意識と安心感を育てる。

・第3回

当日の動線や準備物などを最終確認する場とする。

具体的な企画・合同避難訓練の内容

タイムライン

時間	内容	詳細
0:00	各施設での避難訓練	各施設がそれぞれの課題に即した訓練を実施。学生チームが同行・記録を担当。
0:15	キューズモール(予定)へ移動	各施設からキューズモール(予定)へ移動。移動中の支援体制や段差対応、情報共有の流れも検証。
0:30	趣旨説明・アイスブレイク	全体集合。今回の訓練の目的・流れを説明した上で、チーム分けや簡単な自己紹介を行い、互いの存在を知る関係づくりを行う。
0:40	各施設の取り組み紹介	各施設から、自施設の特徴、避難訓練の様子、直面した課題・工夫などを簡単に共有。異なる現場のリアルを知る時間。
1:00	垂直避難訓練（実践）	津波を想定し、参加者全員でモール内の階段を使って最上階まで避難。車椅子利用者はスタッフの付き添いでエレベーターを使用。可能な限り“担いで避難”も実施し、現場の限界や工夫を体感。
1:45	振り返り	よかった点・困った点・気づいた工夫を共有。パンフレットを準備し、市民への啓発活動へ。
2:00	パンフレット配布	キューズモールやその周辺で、市民に啓発パンフレットを配布。若者・支援者・施設職員が協力して、「避難行動要支援者」への理解を促す声かけも行う。
2:30	クロージング	今後も日常的に助け合える関係性を作っていきたい旨を伝え、解散。各施設ごとに帰宅。

訓練の特徴

・実際に“動く”から見える課題を体感する設計
→「避難所に行くまで」「垂直避難」「誰がどう誘導するか」など、紙のマニュアルでは見えない現場の困難を体験。

・“他施設の支援”を知る学びの場
→施設ごとの違い（高齢者・障がい者・子ども支援など）に触れ、「自分の現場にはない視点」を得る時間に。

・若者も支援の担い手に
→学生たちが誘導係・記録係として参加。「支援される側」ではなく「支える側」としての経験を提供。

・啓発のアクションへつなげる
→訓練で得た学びを市民にも伝える機会としてパンフ配布を実施。“内向き”で終わらない公共性のある防災訓練。



啓発パンフレットの作成（情報発信）

啓発パンフレットの作成

【訓練当日までに制作】

本事業では、避難行動要支援者の存在を伝えるパンフレットを制作します。参加施設や団体からの声を聞き、その内容を反映するとともに、市民にもわかりやすく伝えることを目的としています。「一緒に考える防災・福祉」のきっかけとなる一冊を目指します。

【誰が届けるか】

パンフレットは、訓練に参加した支援者・学生・当事者たちが、モール内やその周辺で市民に直接配布を行います。「ただ配る」のではなく、当事者が想いを込めて届け、支援を自分ごととして感じてもらう対話のきっかけとします。

デザインのイメージについて

避難行動要支援者という少し難しいテーマを扱うからこそ、やわらかく親しみやすいトーンで、誰もが手に取りたくなるような誌面構成を意識します。また、「避難行動要支援者という人がまちにいる」が伝わることを第一に考えています。伝え方については、今後デザイナーと検討中ですが、漫画・イラスト・クイズ形式など、思わず見なくなる工夫を取り入れていく予定です。（A3見開きを予定）

発信方法について

◎市民への手渡し配布・施設配架

訓練後、モール館内や周辺での手渡しによる配布を実施します。支援者や若者が直接声をかけながら渡すことで、「伝わる・残る」発信を目指します。また、参加施設や公共施設等にも配架し、多くの方の目に留まるように努めます。市民が多数利用している施設で配布することで、まだ興味がない市民にも知ってもらう機会を作ります。

◎Web・SNSでの公開

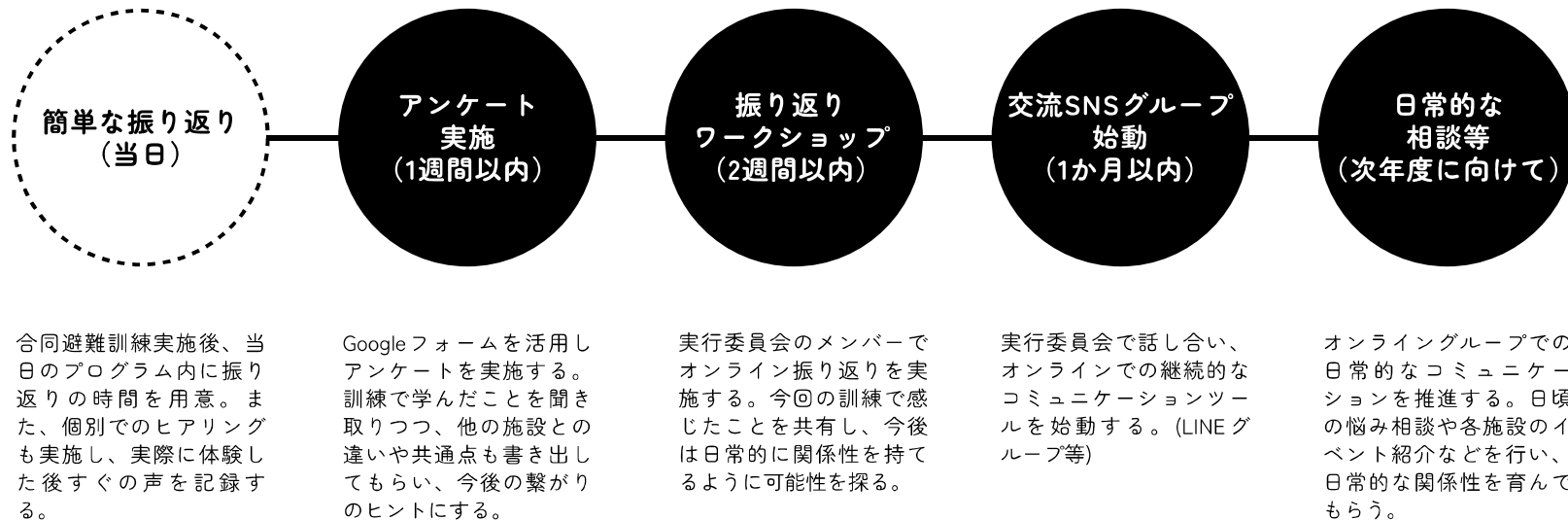
パンフレットのPDF版はWebサイトやSNSでも公開し、より広く市民・支援者・教育関係者へ届けていきます。また、Instagramを立ち上げ、制作過程や参加者の声も発信し、関心を持った人が次につながるような動線も整備します。過去に尼崎市が制作した冊子へのアクセスも誘引し、より深い理解へと繋げます。



訓練後のフォローアップ

このページでは、避難訓練の“その後”をどう設計するかについて記載します。
本事業では、当日の学びや気づきを一過性で終わらせるのではなく、
関係性や実践知を継続的に育てていくためのフォローアップを段階的に行います。
それぞれの振り返りや交流の機会が、次年度の展開や地域での広がりへとつながるよう設計しています。

全体の流れ



ポイント

◎その場で終わらせない仕掛け

・訓練後の振り返り

避難訓練を“やって終わり”にしないために、当日から継続的な学びや関係性づくりを意識した仕掛けを用意しています。訓練直後には、参加者それぞれの気づきや困りごとを記入する「ふりかえりカード」を使い、現場のリアルな声を回収。その声は、次に活かすアイデアのタネとしてデータ化し、全体で共有します。

・継続的な連絡へ

LINE グループなどを活用し、施設間の“ゆるやかなつながり”を日常に残していくことも試みます。日常的な悩み相談ができる関係を、この訓練から生み出すことを目指します。

◎次年度につなぐ振り返り

訓練の2週間以内には、実行委員を中心としたオンライン振り返り会を開催します。今回の振り返りに留まらず、「次やるとしたらどうしたい?」「他地域で応用するなら?」など、実践的な問いをベースに対話を行います。この場で出た学びやアイデアは記録に残し、年度末には“次の開催地や実施団体”を再編・リレーする仕組みづくりに活かしていきます。また、非日常の訓練から日常への移行を実現させ、継続的な関係性構築へと繋がります。

◎次年度に向けて

実行委員会が担い手となる動きに加え、他地域での実施や市民の巻き込みなど、今年度の取り組みをきっかけに展開します。

今回の業務における弊社の強み・類似の事業の受託実績

今回の業務を遂行するにあたっての弊社の強みを以下に列挙します。
尼崎市内での多様なプロジェクトの経験と、福祉や防災・地域との繋がりを活かして本事業に取り組みます。



福祉に関するプロジェクト実績

兵庫県尼崎市の「ミーツ・ザ・福祉」や埼玉県草加市の「ふくらむフクシ研究所」、大阪府豊中市の「いきてゆくフェス（ウィーク）」など、2017年以降、障がい・高齢福祉領域でのチャレンジと実績があります。これまで福祉の世界を外へとひらいていく取り組みを多数行いました。



あまがさきキューズモールでのイベント開催

2020年から、あまがさきキューズモールで定期的にイベントを開催しています。子ども向けのプロジェクト（キッズハロアやおつかいチャレンジ）、本好き向けのプロジェクト（ぶぶぶバザール）、マルシェイベント（土市）など、多様な世代や関心に向けた企画の取り組み実績があります。



防災関係者との繋がり

事業責任者の今井は、高校が防災の専門学科、大学が社会安全学部だったこともあり、防災関係者との繋がりを持っています。また、ぼうさい甲子園の運営経験や、小中高への防災出張授業、防災キャンプの講師など、防災に関する事業の実績もあります。



多様な世代や属性に刺さるクリエイティブスキル

これまでさまざまな媒体や広報知見を溜めてデザインアウトプットを行ってきました。そのスキルに加えて、福祉的側面や障がいのある人、マイノリティも巻き込んだデザインをつくることで話題のインパクト性や拡散力を高めることが可能です。